

言語・文学分野の参照基準検討分科会（第4回）議事要旨

1. 日時 平成23年5月20日（金） 15:00～17:00
2. 場所 日本学術会議6階 6-A(2)会議室
3. 出欠 （出席12名） 庄垣内委員長、塩川副委員長、柴田（翔）幹事、小野委員、川合委員、北原委員、田口委員、寺田委員、長島委員、福井委員、藤本委員、山川委員
（欠席6名） 鳥飼幹事、加藤委員、川嶋委員、柴田（元）委員、林委員、平田委員

4. 議事

- （1）言語・文学分野をめぐる断想ー中国古典学の立場からー（川合委員）
- （2）発語の不可能性について（山川委員）
- （3）言語・文学分野の参照基準の策定について（意見交換）

○長い間「言語・文学」に絶対的な価値観を置き、その能力を持つものが社会の支配者として君臨していた中国も、市場経済の発達が進み法学や経済学等の実用的な学問が重視されるようになり、「文」の支配が今終わろうとしている、これは今までの中国は経験したことがないことで、一種の文化大革命かもしれない。しかし「言語・文学」は社会にとって必須の能力であり、特に一部の人々に握られていた「公共的言語」を広く人々のものに高めることはその教育に携わる者にとっての任務でなければならない。（川合先生）

○中国での状況はヨーロッパと似ている。口頭による弁論術より書き言葉の方が重視されるというのは少し違うが、言語と文をエリートが使い政治と関わるということ、学と術の関係も同じ関係にある。また、大学進学率が50%を越えた段階で、社会生活に参加するための公共的言語能力を身に付けることは重要であるが、日本のような平等主義的な社会でそれを行うことは、逆に差別的な状況を生じさせてしまうということも踏まえておかなければいけない。（塩川先生）

○一部の人々が占有していた公共的言語を広く人々のものにする方向性は否定されないと思うが、そうするとスーパーエリートを作ろうという動きが出てくる。（川合先生）

○言語と文学を考えたときに層が2つある、1つは情報を理解すること、もう一つは人間を理解すること、ツイッターはちゃんとした言葉ではないというより、重要なのは情報リテラシーを持っているか、情報の根拠を分析して読み解くことができるかということであり、その次に人間を理解するところに行きつく。日本語は意味を伝達するだけでなくニュアンスの言葉、あえて言わず察する能力、日本語が減びるとき日本が減びるというのは例えばそういう話し方なのだろう。グローバル時代においては意味と情報を理解することがより重要になるが、その先にある豊かな日本語を使って人間を理解する能力、ニュアンスを理解するため

の言葉を教育することが課せられているのだと思う。(藤本先生)

- 参照基準の目的としているところは、一つは学生個人に対する教育であり、もう一つは卒業後社会人となった時にその教育によって養われた能力はどのように役に立つのかということ。今までの議論はどちらかという情操というか広い意味での教養という方向に軸足が向いていたような印象を受けたので、職業人あるいは社会人を目指すというような出口のところのイメージがはっきり見えるような形で書く必要があると思う。(田口先生)
- 中国は古典的教養を頂点とする教養教育を持っている人たちが特権を持って支配するということであり、植民地教育に似ている。グローバル化によってそれが破壊されて経済主義に適応する方向にシフトしている状況は日本も同じであるが、民主主義には人文学が必要だという考え方もある、それはグローバル時代では他国の文化を知ることが大切であり、正確に情報を理解しそれを相手に論理的に伝えることも大切であるという考え方。諸文化を知ること、他者への共感を学ぶには文学や芸術が必要である。(小野先生)
- 3月11日から違う世界になり、これから違う思想が出てくると思うが、それを繋ぐものが正にこの言語・文学分野。若い人が苦勞している混沌とした大学時代に参照基準を作成することで何らかの指針を出すことができるのではないか(寺田先生)
- スキルを身に付けるという意味では予備校が日本の教育を支えている。若者は一応長文を書くスキルを持っているが、もう少し感情や内省的な言葉が出てくるようなスキルとは違う意味での言葉を引き出す能力を養成する必要がある。ツイッターにおける言葉と過去の豊かな森としての言葉の間にしっかりとした橋を掛けるということは断念しかかっていたが、そうではなく、橋を掛けるのだということ。それは具体的には難しいかもしれない。参照基準は場合によっては研究する大学とそうでない大学を分けた方が良いのかもしれない。(長島先生)
- 〔言語・文学分野の概念図(110526)の解説〕「言語・文学」を一つのまとまりとして考えるのは、「言語」と「文学」が共通の根幹を持っているという認識があるからである。その根幹は、「ことば」と「人文的教養(仮称)」である。ことばは、人間の根本的な営みであるコミュニケーション・思考・表現を支える働きであり、人間に生まれながらに備わった能力である。それに対して、人文的教養というのは、広い意味での教育によって育成される文章能力(文の読み書き、談話を構築する能力)であり、文化の所産であると同時に、文化を形成する能力として、人間の社会生活・職業生活・精神生活において根本的な役割を果たしている。言語も文学もこのような人文的教養に立脚して、相互に緊密な関係を取り結びながら成立・発展することを通じて、逆に幹である人文的教養のあり方に影響を及ぼす。
- 言語と文学はとりわけ教育の場面で緊密な関係を取り結んでいる。近代以降の公教育において、自国語の教育はその中心をなすが、日本の「国語」教育はもとより、諸

外国の教育においても両者は一体となっている。そうだとすれば、国語や外国語の教員養成も、言語・文学分野の枝の一つに入ってくる可能性がある。参照基準の目的の一つが、当該分野の社会における効用を明らかにすることにあるとすれば、この問題も避けて通れないのではないか。